

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：37125

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25862133

研究課題名(和文) SSTを活用した看護学生のコミュニケーションスキルの発展に関する研究

研究課題名(英文) The effects of Social Skills Training on the communication skills of nursing students

研究代表者

石本 祥子 (ISHIMOTO, Sachiko)

聖マリア学院大学・看護学部・助教

研究者番号：30538583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ソーシャルスキルトレーニング(以下SST)を看護学生の臨地実習に導入し、SSTが臨地実習中の看護学生のコミュニケーションスキルに及ぼす効果を明らかにすることを目的とした。その結果、学生は1.患者自身の身体感覚・ボディイメージについての情報収集、2.患者の否定的な発言に対する対応、3.患者が拒否するときの対応、4.排泄についての情報収集に困難を感じていることが明らかとなった。また、SSTにおいてロールプレイを実施した学生とロールプレイを実施していない学生を比較した結果、実習前後ともにKiss-18の自分の感情や気持ちを素直に表現することができるかについて負の相関が認められた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the effects of Social Skills Training (SST) on the communication skills of nursing students during clinical training.

The results indicated that students felt difficulty about; 1. Gathering information about patients' body sensation and body image; 2. Responding to patients' to negative remark; 3. Responding to patients' refusal of service; 4. Collecting information about excretory function. Also, when comparing the group that participated in the SST role play with the group that did not, there was a negative correlation in the former with the Kiss-18 scale of social skills, when asked Can you express your feelings and mind truthfully? .

研究分野：基礎看護技術

キーワード：コミュニケーションスキル 看護学生 ソーシャルスキルトレーニング

1. 研究開始当初の背景

看護師は患者との関係のみならず同僚や上司、他職種との良好な関係を築くうえでもコミュニケーションスキルが求められている。

しかし、コミュニケーションツールが多様化している現代社会において、多くの若者は人との直接的コミュニケーションが減少し、その結果、対人関係形成能力が低下していることが指摘されている。

これは、看護学生においても同様の傾向にある。したがって、看護学生に対するコミュニケーション能力の開発は重要課題といえる。しかしながら、看護の基礎教育において、コミュニケーションスキルを習得するための教育方法は十分に開発されていない。そのため、看護学生は、臨地実習での慣れない環境の中で患者やスタッフとのコミュニケーションで様々な不安や困難に直面し、その思いを抱えながら実習に取り組んでいる現状がある。

このような現状の中で近年、小中学校、高校などの教育機関において、精神障害者の治療のひとつである SST (Social Skills Training;以下 SST)を児童、生徒のコミュニケーションスキルを育成する技法として活用し効果を得たとの報告がある。そこで、SST を看護の基礎教育に導入することによって、看護学生のコミュニケーション能力の向上を期待できるのではないかと考える。

2. 研究の目的

本研究は、近年教育現場で活用されている SST を看護学生の臨地実習に導入し、SST が臨地実習中の看護学生のコミュニケーションスキルに及ぼす効果を明らかにする。さらに、看護学基礎教育におけるコミュニケーションスキルの教育方法の示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

1.対象:A 大学看護学部 3、4 年生のうち慢性期の成人看護学実習中の学生。

2.期間:平成 25 年 5 月～平成 27 年 3 月。

3.方法:3 週間の臨地実習中に「患者とのコミュニケーションで感じた困難」をテーマに週 1 回の SST を実施した。SST の内容は学生が自己を客観的にみることができるよう、ロールプレイを撮影し、フィードバックする時間を設けた。SST を開始する前に右記の図 1 に示すように環境設定を行った。

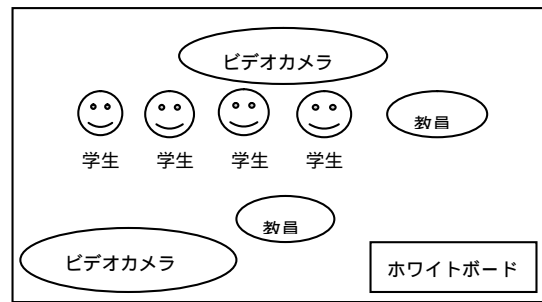


図 1. SST の環境設定

表 1 に SST の実際のプログラムを示す。

表 1.SST プログラム

1. 導入：SST の目的、方法の説明
2. ウォーミングアップ (初回のみ)
 - 2 回目以降は、前回の課題が実践できたか報告する
3. SST を実施する場面の設定
 テーマ「患者とのコミュニケーションで困難を感じたこと」
4. 実際の困難を感じた場面についてどのようにすればよいか意見を出し合う
5. 出された意見の中から実施できそうなものをロールプレイ
6. メンバーからよかった点を言ってもらう
7. ロールプレイをビデオを見て振りかえる
8. もっとこうしたらよいのではないかという意見を出し合う
9. 本人やメンバーの意見を取り入れて再度ロールプレイ
10. メンバーからよかった点を言ってもらう
11. ロールプレイをビデオを見て振りかえる
12. まとめ・今週の課題の設定

SST の効果は、実習前後に Kikuchi's Social Skill Scale(Kiss-18;菊池、1988)、看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度(上野、2005)の 2 尺度を使用し、5 段階評定法にて回答を得た。また、学生のコミュニケーションに対する自信について、一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES;坂東、1986) を使用し、2 段階評定法にて回答を得た。SST がその後の実習に役に立ったか否かについては自由記述として、回答を求めた。

4.分析方法: 尺度の回答結果は、SST にて自身の課題についてロールプレイを行った学生(以下、ロールプレイ群)と SST には参加したがロールプレイは行っていない学生(以下、非ロールプレイ群)の 2 群に分け分析した。各尺度の比較には相関分析を行った。自由記述については質的に内容の分析を行った。

5.倫理的配慮:実習開始前に学生に研究の趣旨を口頭で説明し、文書にて同意を得た。なお、本研究は所属機関倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

【結果】

19名の参加者のうち、実習前後で回答のあった13名のデータを調査対象とした(有効回答68.4%)。分析対象である13名の属性は、3年生9名(男子学生1名)、4年生4名であった。

13名のうちロールプレイ群が7名、非ロールプレイ群が6名であった。ロールプレイ群は、3年生6名、4年生1名、非ロールプレイ群は3年生3名、4年生3名であった。

(1)各尺度の分析結果

実習前のロールプレイ群と非ロールプレイ群の相関分析の結果は、Kiss-18の知らない人ともすぐに会話が始められるか、自分の感情や気持ちを素直に表現することができるか、何か失敗したときに、すぐに謝ることができるか、看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の相手の情報を確認する、GSESの人と比べて心配性であるの5項目で負の相関が認められた(表2)。

表2.実習前の結果

| 項目 | 相関係数 | 有意確率 |
|--------------------------|---------|-------|
| 知らない人ともすぐに会話が始められるか | -.676* | 0.011 |
| 自分の感情や気持ちを素直に表現することができるか | -.599* | 0.030 |
| 何か失敗したときに、すぐに謝ることができるか | -.613* | 0.026 |
| 相手の情報を確認する | -.555* | 0.049 |
| 人と比べて心配性である | -.720** | 0.006 |

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

実習後の結果は、Kiss-18の相手が怒っているときに、上手くなだめることができるか、相手から非難されたときにも、それを上手く処理できるか、仕事上で、どこに問題点があるかすぐにみつけることができるか、自分の感情や気持ちを素直に表現することができるか、仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうが、看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の相手の話を聞いた後に要約するの6項目で負の相関が認められた(表3)。

表3.実習後の尺度の結果

| 項目 | 相関係数 | 有意確率 |
|----------------------------|---------|------|
| 相手が怒っているときに、上手くなだめることができるか | -.606* | .028 |
| 相手から非難されたときにも、それを上手く処理できるか | -.685** | .010 |

| | | |
|---------------------------|---------|------|
| 仕事上で、どこに問題点があるか | -.641* | .018 |
| ぐにみつけることができるか | | |
| 自分の感情や気持ちを素直に表現 | -.612* | .026 |
| することができるか | | |
| 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうが | -.556* | .048 |
| 相手の話を聞いた後に要約する | -.723** | .005 |

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

(2)SSTで実施したテーマの分析結果

実施した全11回のSSTで、患者とのコミュニケーションで感じた困難について学生自身が発言した具体的なテーマは11テーマ挙げられた。11のテーマとSSTの内容の類似性を検討した結果、1.患者自身の身体感覚・ボディイメージについての情報収集、2.患者の否定的な発言に対する対応、3.患者が拒否するときの対応、4.排泄についての情報収集の4つのカテゴリーに集約された(表4)。

表4.SSTで挙げられた患者とのコミュニケーションで感じた困難についてのテーマ

【身体感覚・ボディイメージについての情報収集】

・糖尿病の患者に対する痺れの確認について

(尋ねてもはっきり返答が返ってこない)

・今の身体状況についてどのように思っているのか尋ねる方法

・ヘルニアがあることでのボディイメージや痛みについての

質問方法

【患者の否定的な発言に対する対応】

・「よくならないだろうね…」という患者への反応

・片麻痺がある患者から「左足をつぶしてみたら感覚が戻る

かもしれない」と言われたときの対応

・「自分が悪いから学生がついているんでしょう」と言う患者に

に対する対応

【患者が拒否するときの対応】

・治療食を食べない患者への食事の促し方

・薬を「飲まなくていい」と言う患者への対応

・病気の話について「話したくない」と言う患者への対応

【排泄についての情報収集】

・排泄について質問する方法

・排泄や使用している薬について情報収集したいが、患者が

「もういい」「きつい」と言う

また、表 4 に挙げられたテーマ以外にも、発語が難しい患者とのコミュニケーションについて、沈黙、家族への対応、看護師とのコミュニケーションについて学生が困難に感じているテーマも挙げられた。

さらに、実習 1、2 週目は困難と感じているコミュニケーションについて学生から複数のテーマが挙げられたが、実習の最終週である 3 週目は、学生から SST のテーマについての提案はなかった。よって、「患者との別れの挨拶について」の SST を実施した。

【考察】

(1) 尺度の結果について

ロールプレイ群と非ロールプレイ群を比較した結果、実習前後ともに正の相関がなく、負の相関が認められたことについては、ロールプレイ群の学生は、実習開始前よりコミュニケーションに対する困難を強く感じていることが考えられる。よって、SST において、自身が困難と感じている具体的テーマを発言し、ロールプレイを実施したと考える。しかし、3 回の SST のみでは、臨地実習中の困難を全て軽減することができなかつたため、実習後もロールプレイ群は負の相関が認められたと考える。

また、実習前後でコミュニケーションについて困難と感じていることは変化していることが尺度の結果から明らかとなった。

実習前のロールプレイ群と非ロールプレイ群の相関の結果については、kiss-18 の知らない人ともすぐに会話が始められるか、自分の感情や気持ちを素直に表現することができるか、何か失敗したときに、すぐに謝ることができるか、看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の相手の情報を確認する、GSES の人と比べて心配性であるの 5 項目に負の相関が認められた。学生は、臨地実習において、一人の患者を受け持ち、受け持ち患者とのコミュニケーションから、情報収集を行う。よって、実習開始前は、初めて会った患者と上手くコミュニケーションができるかということや、自身で相手の情報を確認することができるか不安であったと推測される。また、患者からの情報収集を行う際には、一方的に会話をするのではなく、学生自身が患者との会話から感じたことを表現し、信頼関係を成立させる必要がある。よって、実際に自分の感情や気持ちを素直に表現することができるかということに不安を感じていたと考える。さらに、実習では学生が受け持ち患者への看護介入を実施すが、学生は初めて経験することも多く、上手くできないこともある。さらに、学生は看護介入を実施する際、医療スタッフや教員の支援が必要となるが、学生は医療スタッフとのコミュニケーションにも困難を感じている。これは、SST 中に学生が発言していた内容からもいえる。よって、学生は何か失敗した

ときに、すぐに謝ることができるかということも心配していると考えられる。実習前には、これらの不安があるため、GSES の人と比べて心配性であるという項目にも負の相関が認められたと考える。

実習後についてもロールプレイ群の学生と非ロールプレイ群の学生を比較した結果、Kiss-18 の相手が怒っているときに、上手くなだめることができるか、相手から非難されたときにも、それを上手く処理できるか、仕事上で、どこに問題点があるかすぐにみつけることができるか、自分の感情や気持ちを素直に表現することができるか、

仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうか、看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の相手の話を聞いた後に要約するの 6 項目で負の相関が認められた。これは、学生が挙げている具体的テーマからも明らかであるように、学生は患者の否定的な発言や患者から拒否されることに対して、困難を感じている。よって、Kiss-18 の相手が怒っているときに、上手くなだめることができるか、

相手から非難されたときにも、それを上手く処理できるかの 2 項目に負の相関が認められたと考える。学生は、SST において、上記のような場面の対処方法について解決方法を学んだ後、実際に SST のロールプレイにおいて実施したことを、臨床の場面で活かすことができたと報告していたが、実習終了後も困難感が残っていることが明らかとなった。また、実習では、患者の看護上の問題を検討し、目標を設定して看護介入を行う。しかし、学生が問題点を見出し、介入を実施するまでには、多くの時間を要する。そのため、

仕事上で、どこに問題点があるかすぐにみつけることができるかの項目に負の相関が認められたと考える。また、ロールプレイ群の学生は、患者との会話の内容を集約することにも困難を感じていたことが、相手の話を聞いた後に要約するに負の相関が認められたことから明らかとなった。患者の会話を要約できないことは、問題点をすぐに見つけられないことにも繋がっていると考える。さらに、仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうかという項目については、看護の目標や自身の臨地実習の目標を立てることに困難を要したことが要因であると考えられる。自分の感情や気持ちを素直に表現することができるかについては、ロールプレイ群の学生と非ロールプレイ群の学生は負の相関が認められており、SST においてロールプレイを実施したが、自身の感情を素直に表現することは困難であると感じていることが示唆された。

これらの結果から、SST において自身の抱える患者とのコミュニケーションでの困難についてテーマを提案する学生は、ロールプレイを実施していない学生より、コミュニケーションでの困難を多く抱えていることが

明らかとなった。特に、自分の感情や気持ちを素直に表現することについて苦手意識をもっていることが推察される。よって、今後は、他者に対して自己表現をする能力を養う必要があると考える。

(2) SST のテーマ分析について

学生が患者とのコミュニケーションにおいて困難を感じていた 患者自身の身体感覚・ボディイメージについての情報収集、について SST の内容から検討すると、学生は患者からこれらの情報を収集することによって、患者との関係性が崩れるかもしれないという不安を抱えていることが示唆された。また、患者の否定的な発言に対する対応、患者が拒否するときの対応については、学生が直面した経験がない状況に戸惑いを生じ、適切に対応できなかったことが要因と考えられる。また、この戸惑いも患者との関係性の悪化を危惧していることから生じていることが推察された。排泄についての情報収集は、患者が羞恥心を感じるのではないかという学生の思いから困難を生じていたことが考えられる。しかし、看護学生は看護実践を行う上で必須となる情報の必要性を考え、情報を得るためのコミュニケーション能力を修得する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

石本祥子, 小浜さつき, 日高艶子
臨地実習中の看護学生に対するソーシャルスキルトレーニングの活用効果(第2報), 第33回日本看護科学学会学術集会, 2013年12月7日, 大阪国際会議場, (大阪府大阪市)

石本祥子, 小浜さつき, 日高艶子
臨地実習中の看護学生のコミュニケーションスキルにソーシャルスキルトレーニングがもたらす効果, 第34回日本看護科学学会学術集会, 2014年11月20日, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石本 祥子 (ISHIMOTO, Sachiko)
聖マリア学院大学看護学部・助教
研究者番号: 30538583

(2) 研究協力者

小浜 さつき (OBAMA, Satsuki)
聖マリア学院大学看護学部・助教
研究者番号: 20580731

日高 艶子 (HIDAKA, Tsuyako)
聖マリア学院大学看護学部・教授
研究者番号: 50199006